八出覗山遺跡発堀調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第３集

１９７７

津山市教育委員会

例　　言

1. 本書は津山市教育委員会が1974年に実施した八出覗山（やいでのぞきやま）遺跡の発掘調査報告書である。

1. 本書に使用した方位は磁北である。また高さは海抜高である。

1. 本書の作成は，湊　哲夫が担当した。

目　　次

Ⅰ　位置と歴史的環境 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 6

1. 調査に至る経過 …… 6

2. 発掘経過 …… 6

Ⅲ　遺構・遺物 …… 9

1. 箱式石棺 …… 9

2. 竪穴住居址 …… 10

3. 土壙 …… 11

4. その他の遺構 …… 11

5. 遺物 …… 12

Ⅳ　結語 …… 13

図　版　目　次

PL. 1　遺構配置図
2　箱式石棺実測図
3　竪穴住居址実測図
4　遺跡遠景写真
5　箱式石棺写真
6　竪穴住居址写真

挿　図　目　次

Fig. 1　八出覗山遺跡の位置 …… 1
2　周辺主要遺跡分布 …… 2
3　トレンチ配置 …… 7
4　箱式石棺移築状況 …… 7
5　1号土壙 …… 11
6　2・3号土壙 …… 11
7　遺構に伴なわない土器 …… 12

I　位置と歴史的環境

岡山県は地形的に南北に三大別することが可能である。すなわち，北に標高1,345ｍの後山を主峯とする中国山地と南に瀬戸内沿岸の沖積平野があり，その間に標高500ｍ前後の吉備高原がつらなる。この中国山地と吉備高原との間には，大小の河川流域を中心にいくつかの小盆地が東西に点在する。これらのうち，県東部に位置し，かつ最大の規模を有するものが，現在の津山市を中心とする盆地である。この盆地はおおづかみには，中国山地から南に派生してくる標高300ｍ以下の丘陵群と河川流域に広がる小平野とにより構成されている。この地域は，鏡野町から津山市二宮にかけてＬ字状に発達した香々美川・吉井川流域，津山市下横野から大谷に至る南北に連なる宮川流域，さらには，津山市野村から日上にかけて西南方向に広がる加茂川流域のそれぞれの平野を中心とする三小地域に細分することができる。後二者の交点の加茂川と宮川が吉井川に合流する付近には，標高300ｍ前後の南横山・種の山塊から北に派生する標高110～130ｍの低平な台地がある。八出覗山遺跡は，この台地の北端で，吉井川に向かって北に突出した標高114ｍの丘陵上に立地する。遺跡からは，吉井川を隔てて西北に津山市街地を一望することが可能である。遺跡の行政区画は，津山市八出字覗山1365番地である。

津山地方における人間の足跡は，遠く先土器時代に遡る。天神原遺跡（Fig２－16）出土のナイフ形石器[(1)]は，その貴重な証拠である。しかし，以後，縄文時代を通じて，遺構・遺物は非常に少なく，この時代の津山地方は，人跡稀な状態であったと思われる。

紀元前３世紀頃，北九州に成立した弥生文化は，その後急速に伊勢湾沿岸以西の西日本に伝播した。しかし，この西日本への拡大は，一律的のものでなく，当時形成されつつあった臨海沖積平野にそって，点々と伝わったものと推定される。津山地方における弥生前期の遺物は，天神原遺跡[(2)]，山北一丁田遺跡[(3)]（Fig 2

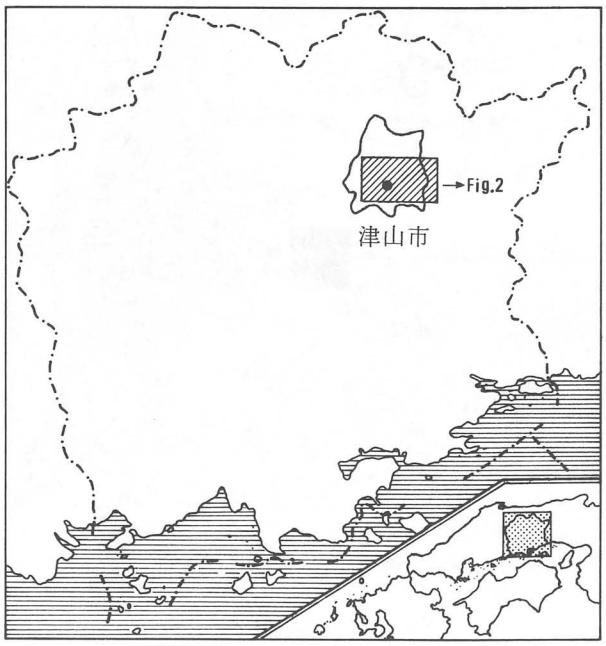
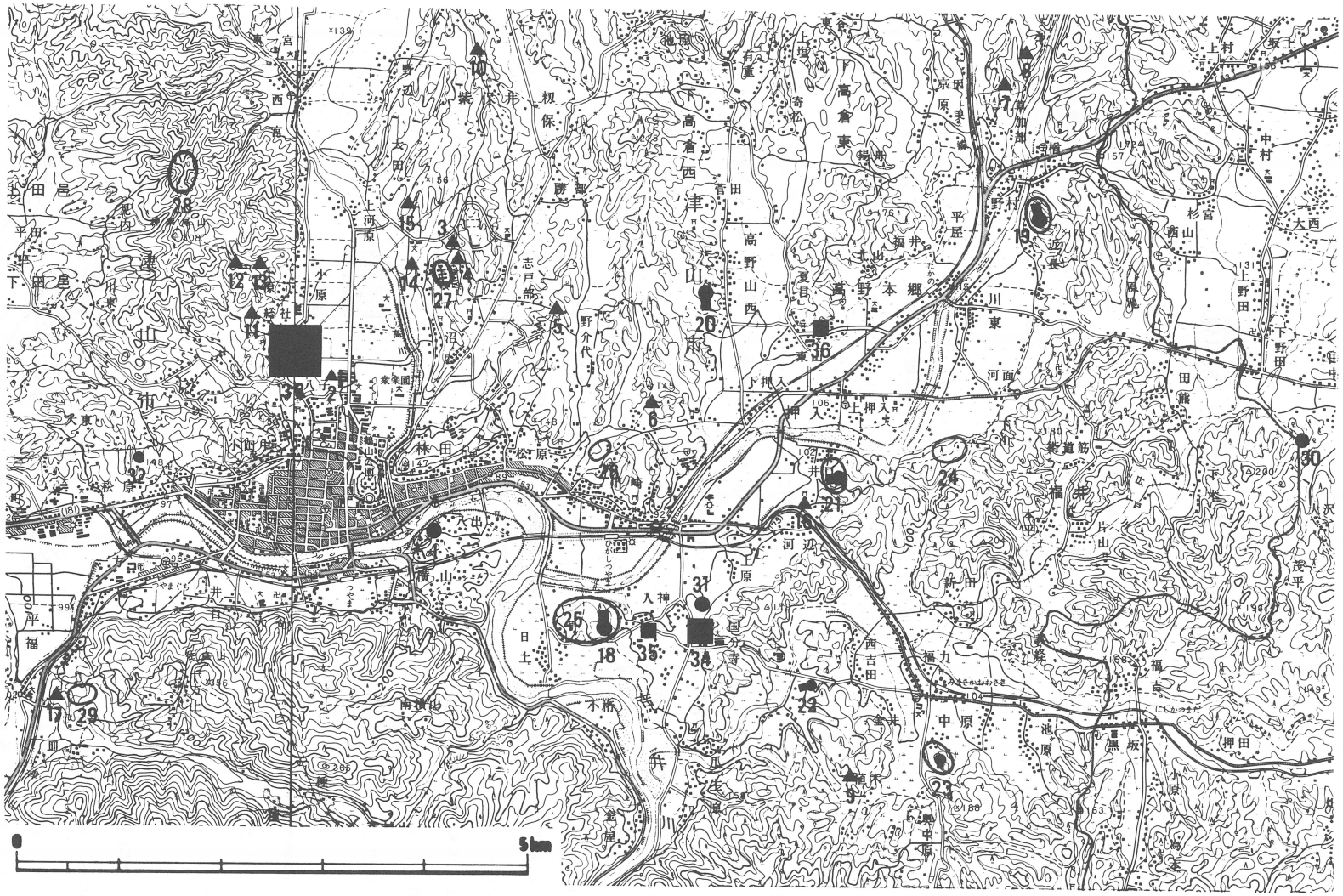


Fig. I　八出覗山遺跡の位置



1．八出覗山遺跡
2．山北一丁田遺跡
3．沼弥生住居址群
4．沼Ｅ遺跡
5．野介代地京遺跡
6．押入西遺跡
7．草加部東蔵坊遺跡
8．草加部鮒込遺跡
9．金井別所遺跡
10．紫保井遺跡
11．総社内山遺跡
12．下道山遺跡
13．権現山遺跡
14，沼京免遺跡
15．大田十二社遺跡
16．天神原遺跡
17．皿丸山遺跡
18．日上天王山古墳
19．近長四ツ塚古墳群
20．高野山西正仙塚古墳
21．まいまい塚古墳群
22．瓜生原小原古墳
23．稲千古墳群
24．三毛ヶ池古墳群
25．日上畝山古墳群
26．川崎六ツ塚古墳群
27．沼古墳群
28．神楽尾古墳群（仮称）
29．皿寺山古墳群
30．金鶏塚１号墳
31．国分寺飯塚古墳
32．小田中狐塚古墳
33．美作国府跡
34．美作国分寺跡
35．美作国分尼寺跡
36．夜半廃寺

Fig. 2　周辺主要遺跡分布
（国土地理院発行５万分の１地形図「津山東部」及び「津山西部」を複製）

－2）などで少数発見されている以外，ほとんど出土例がない。従って，弥生前期の津山地方は，なお縄文時代の伝統を根強く残していた社会と思われる。

弥生中期は初期農耕の技術的限界が克服され，東日本及び西日本山間部へ稲作が波及した時代である。[4] 沼弥生住居址群[5]（Fig 2 －3）・野介代地京遺跡（Fig 2 －5）・押入西遺跡[6]（Fig 2 －6）・草加部東蔵坊遺跡（Fig 2 －7）・草加部鮒込遺跡（Fig 2 －8）・金井別所遺跡（Fig 2 －9）・紫保井遺跡（Fig 2 －10）は，いずれも中期後半の集落遺跡であり，この時期以降，津山地方の遺跡数が急速に増大し，この地方に人々の広汎な定住が開始されたことを物語っている。この傾向は後期に入っても持続され，総社内山遺跡（Fig 2 －11）・沼京免遺跡（Fig 2 －14）・大田十二社遺跡[7]（Fig 2 －15）・天神原遺跡[8]など多くの集落遺跡がある。

弥生時代は政治的関係が発生し，階級社会の形成を準備した時代である。この階級関係の進展は，墓制において顕著に現われる。前期末の畿内・中期の北九州で，すでにかかる関係の萌芽が認められるが，とくに吉備地方の後期の段階できわめて発達した墳墓が出現する。すなわち，平野を見下ろす丘頂や山頂に方形の封土をもち，墳丘中央に木棺を納めた竪穴式石室を有し，その周囲に土壙墓ないし配石墓を従えた方形台状墓が発達する。そして，この墳墓には，後に埴輪に転化する特殊器台が供えられるのである。[9] 津山地方においても，下道山遺跡（Fig 2 －12）・権現山遺跡（Fig 2 －13）・皿丸山遺跡[10]（Fig 2 －17）・上原遺跡の各遺跡において，特殊器台が出土している。しかし，吉備中枢部のような発達した墳墓は知られていない。このことは，津山地方が発達した墳墓を生み出すような階級分化の未成熟なままに古墳時代を迎えたことを示している。

吉備地方に典型をみるような弥生後期の特定個人または特定グループの墳墓は，畿内・山陰・北九州でも出現しており，これは当時の先進地域において普遍的に発達してきた墓制として理解される。従って，古墳の発生は，基本的には弥生墳墓の質的発展と考えられるのであるが，しかしながら，丘頂や山頂に立地し，壮大な墳丘，一定の内部施設，鏡・玉・武器の副葬品のセットを特徴とする発生期古墳と弥生墳墓との間には，なお隔絶した差異を認めなければならない。古墳は弥生後期の特定地域の墓制の発展としてではなく，西日本先進地域の伝統的墓制の統一として出現した。すなわち，弥生末期における階級関係の進展と国際的緊張をふまえて，西日本先進地域の部族連合の首長が王権のもとに結集した倭政権の一元的墓制として，古墳を理解するのである。[11] 津山地方においては，このような発生期古墳[12]は存在せず，古墳の出現は，発展期前半（ほぼ4世紀後半に地定される）を待たねばならない。鏡野町観音山古墳がこれに該当し，日上天王山古墳（Fig 2 －18）もこの時期に属するものかも知れない。津山地方の首長の倭政権への参加が一時期遅れたものと解される。

発展期前半から発展期後半（5世紀前半頃）にかけては，鏡野町赤峪古墳・近長四ツ塚2号墳（Fig 2 －19）・高野山西正仙塚古墳（Fig 2 －20）・美和山1号墳などの前方後円墳が築

造される。このうち，前三者は全長40～50m級の規模であるが，美和山1号墳は全長80mを超え，岡山県北部においては，勝央町植月寺山古墳とともに卓越した規模を誇る。津山地方の首長古墳は，これ以後6世紀代にかけて，国分寺飯塚古墳（Fig 2－31）・井口車塚古墳（Fig 2－21）・川崎玉淋大塚古墳・鏡野町井上火の釜古墳・加茂町万燈山古墳[13]などのように，規模をやや小型化させて継続する。

発展期後半以前の古墳は，比較的大型で，かつ多くの場合単独で営なまれるが，転換期前半（5世紀後半頃）以後には，小規模な古墳が群集してつくられることが多くなる。このことは，前者の被葬者が首長層に限定されていたのに対し，後者のそれが首長層以外にも拡大されたことを示している。この群集墳の被葬者の性格については，まだ不明の点も多いが，一般に家父長制的世帯共同体の家長層であろうといわれている[14]。津山地方における群集墳の形成は，日上畝山古墳群（Fig 2－25）にみられるように，5世紀後半頃から開始された。以後，6世紀にかけて，三毛ケ池古墳群（Fig 2－24）・稲千古墳群（Fig 2－23）・皿寺山古墳群[15]（Fig 2－29）・川崎六ツ塚古墳群（Fig 2－26）をはじめ，おびただしい群集墳が築造された。

古墳時代は政治的身分関係が古墳によって表徴される時代であったが，7世紀末に成立した律令制は，前代のような即物的な身分関係ではなく，官位によって表徴されるいわば観念的な身分秩序を形成した。このような律令国家は，国家意志に集約された支配階級の共同利害を被支配階級に強制する組織であり，それは中央・地方の官僚機構によって貫徹された。このうち，地方には国・郡が置かれたが，その支配関係は在地首長の伝統的権威に依拠したものであった[16]。津山地方は当初備前国に編成されたが，713年，津山地方を含む岡山県東北部を割いて美作国が新設された。美作国分置の事情は，必ずしも明確ではないが，おそらく，古墳時代以来の製鉄を基盤としたこの地方の政治的かつ文化的結合を考慮したものであろう。美作国府跡[17]（Fig 2－33）は，宮川西岸の段丘上にあり，方6町の府域が想定されている。吉井川の一支流久米川北岸にある宮尾遺跡[18]は，久米郡衙と推定されており，7世紀後半から平安時代にかけてのコ字型の建物群が明らかにされている。

律令時代は，首長の権威の表徴として，またその氏の守護を目的として，さらには，鎮護国家のために多くの寺院が造営された。津山地方の最初の寺院跡は，先の宮尾遺跡に西接する久米廃寺[19]である。塔を中心に独特の伽藍配置をとり，白鳳時代に創建されたことが判明している。また，奈良時代には，官寺としての美作国分寺（Fig 2－34）・美作国分尼寺（Fig 2－35）が相ついで造営された。この他，高野本郷（Fig 2－36）・下横野・椿高下・福田などで奈良～平安時代の古瓦が出土する遺跡があるが[20]，遺跡の性格を含めて詳しいことは不明である。

註

(1) 岡山県教育委員会「天神原遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 1975，所収）

(2) 註(1)に同じ

(3) 植月壮介・近藤義郎「津山市山北一丁田遺跡」（近藤義郎・渋谷泰彦編著『津山弥生住居址群の研究 ― 西地区 ―』1957，所収）

(4) 近藤義郎「弥生文化論」（『岩波講座 日本歴史1 原始および古代1』1962，所収）

(5) 近藤義郎・渋谷泰彦前掲書

(6) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973）

(7) 津山教育委員会『大田十二社遺跡 ―発掘調査略報―』1976

(8) 註(1)に同じ

(9) 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」（『考古学研究第13巻第3号』1967，所載）

(10) 河本清「津山市丸山遺跡発見の遺物」（津山市教育委員会『津山市文化財年報1』1975所載）

(11) 近藤義郎「前方後円墳の成立」（『考古論集〔慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集〕別冊』1977，所収），甘粕健「古墳の成立・伝播の意味」（岡崎敬・平野邦雄『古代の日本9研究資料』1971，所収）

(12) 古墳前代の時期区分としての以下の発生期・発展期・転換期の概念については，月の輪古墳刊行会『月の輪古墳』1960による。

(13) 加茂町文化財保護委員会『万燈山古墳』1974

(14) 近藤義郎編『佐良山古墳群の研究第1冊』1952，門脇禎二『日本古代共同体の研究』1960

(15) 河本清「美作津山市寺山A1号墳」（『古代吉備第6集』1969，所載）

(16) 石母田正『日本の古代国家』1971

(17) 岡山県教育委員会「美作国府」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』1973，所収）

(18) 岡山県教育委員会「宮尾遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973，所収）

(19) 岡山県教育委員会「久米廃寺」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973，所収），同「久米廃寺」（補遺編）」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』1978，所収）

(20) 今井尭「原始社会から古代国家の成立へ」（『津山市史第1巻　原始・古代』1972，所収）

II　調査の経過

1.　調査に至る経過

1974年９月，学校法人作陽学園（理事長　松田英毅）から，津山市長に作陽短期大学校舎建設にかかる申請書が提出された。この建設用地の南々西約３００ｍで，1962年８月，作陽高等学校々舎増築工事の際，若干の袋状竪穴と多数の弥生土器が出土しており，[(1)] 今回の短期大学建設用地にも遺跡が存在する可能性が認められた。そこで，当委員会は10月11日，同用地の分布調査を行なったが，ブッシュや雑草に妨げられたためか，遺跡の存在を示すような手がかりは得られなかった。しかし，当委員会では，前記の理由により，また周辺の地形からみて，なお当用地に遺跡が存在する可能性が強いと考え，作陽学園に遺跡の有無の確認のためのトレンチ調査が必要である旨を通知した。

そして，10月23日から同28日まで，当委員会が学園の経費負担のもとに，前記のトレンチ調査を実施した。トレンチは，工事計画地内の西側丘陵上に３箇所（第１～第３トレンチ），小さな谷をはさんだ東側丘陵上に３箇所，計６箇所設けた。このうち，東丘陵では遺構・遺物を確認しなかったが，西丘陵の第２トレンチで，竪穴住居址１軒（１号住居址の北端部）とそれに伴なう少量の土器片を採集し，この丘陵上に遺跡が存在することを確認した。

この調査結果にもとづき，作陽学園から文化庁長官に，11月１日付けで遺跡発見届出書が，また，11月２日付けで埋蔵文化財発掘届出書が提出された。そして，当委員会と作陽学園との間で，遺跡の取扱いについて協議を重ねたが，最終的に発掘調査による「記録保存」を行なうこととした。

2.　発掘経過

発掘調査は当委員会により，1974年11月５日から同16日までの12日間，作陽学園の経費負担のもとに実施された。調査対象地は，先に竪穴住居址を検出したところの吉井川に向かって，北に突出する丘陵のうち，ほぼ標高１１０ｍ以上の頂部平担面とその緩斜面（面積約3,000㎡）とした。発掘の原因となった作陽短期大学校舎建設が，1975年３月末日には完了しなければならない事情があったので，発掘調査に充分な期間をあてることができず，せいぜい10日間程度の短期調査を余儀なくされた。このため，推定遺跡範囲の全面発掘は不可能となったので，部分発掘にとどめた。すなわち，南北50ｍ，東西60ｍの調査対象地に，任意に幅２～2.５ｍのトレンチを10箇所設け（総面積５３５㎡），遺構を検出した部分について，必要な範囲で調査区

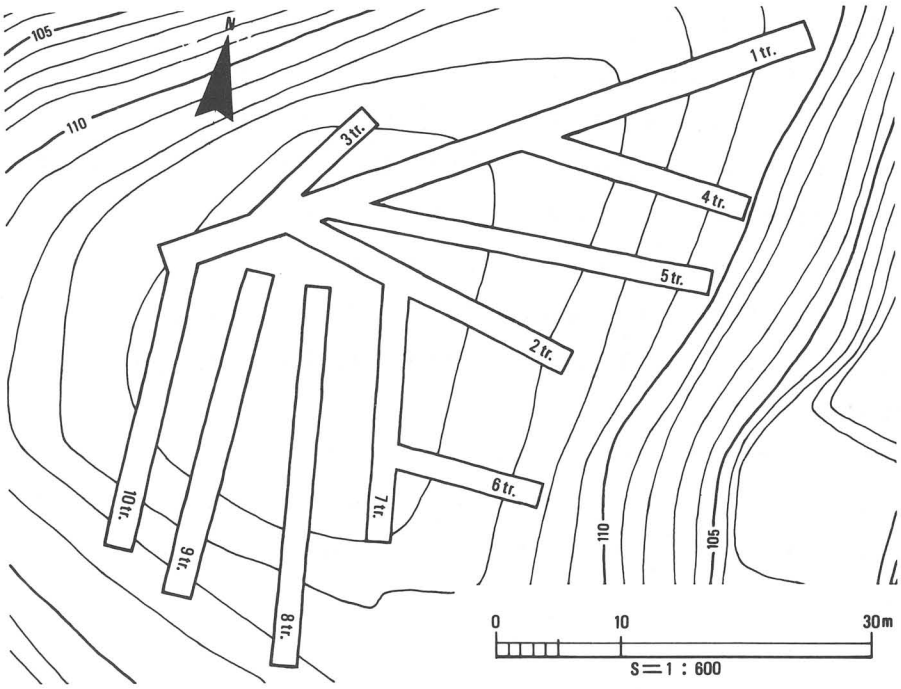


Fig. 3 トレンチ配置

の拡張を行なった（Fig. 3）。

調査区の大部分は，かって桃畑とされていた所であり，丘陵頂部を除き層位は撹乱されており，遺構の遺存状況もよくなかった。検出された遺構は，箱式石棺1基，竪穴住居址2軒，土壙3基，不明遺構2箇所である。このうち，箱式石棺は1975年9月，新設された作陽短期大学校庭に移築された（Fig. 4）。なお，発掘調査は事前の確認調査を含めて，津山市教育委員会社会教育課主事　湊　哲夫が担当し，実測については株式会社松村組の鎌　千昭氏の援助を受けた。次に発掘日誌を記す。

11月5日　　発掘開始。先のトレンチ調査により確認した竪穴住居址の付近を拡張し，プランの検出に努める。

11月6日　　竪穴住居址のプランを検出。その結果，2軒の竪穴が重複していることが判明したが，プランの切り合い関係は把握できず。土層観察用あぜ1箇所を残して掘り進む。

Fig. 4 箱式石棺移築状況

11月７日・８日　　トレンチの掘り下げ。

11月９日　　竪穴住居址土層観察用あぜ断面の実測。実測後，あぜをとり払う。第９トレンチ北端で，方形の土壙を検出。付近を拡張して長方形のプランを検出する。土壙内をやや掘り下げたところで，箱式石棺蓋検出。さらに周囲を掘り下げる。この際，土層観察用あぜを第９トレンチ西壁にそって残したため，石棺主軸と直交せず，あとで困る。

11月10日　　箱式石棺の土層観察用あぜの断面実測。実測後，ただちにあぜをとり払い，掘り下げる。また，竪穴住居址の写真撮影を行なう。

11月11日　　竪穴住居址を実測し，住居址の発掘終了す。第１及び第５トレンチで，それぞれ土壙検出。

11月12日　　箱式石棺蓋の実測及び写真撮影。その後，蓋をとりはずす。枕石あり，副葬品なし。棺内全面に朱が認められる。１号土壙・２号土壙のプラン検出作業を行う。２号土壙は３号土壙と重なり合う。第６トレンチで，柱穴１個を検出。付近を拡張して，不明遺構１を検出する。

11月13日　　１号土壙の実測及び写真撮影。

11月14日　　箱式石棺身の実測及び写真撮影。

11月15日　　不明遺構１，２号及び３号土壙の実測。箱式石棺身をとりはずす。

11月16日　　不明遺構２の実測。箱式石棺墓壙の実測。石棺をすぐ南の空屋に運び，仮保管する。

註

(1)　河本　清「津山市桃山作陽高等学校弥生時代竪穴群」
（『古代吉備第５集』１９６３，所載）

III　遺構・遺物

1.　箱式石棺（ＰＬ２・５）

丘陵頂部平担面のやや西よりにある。厚さ15cmの表土層の下がただちに地山となっており，石棺を埋納するための土壙は地山を切り込んでつくられていた。この土壙は，長辺３９７cm，短辺１８８cm，深さ約５５cmのほぼ長方形のもので，石棺を置く部分は，さらに10～20cm掘り窪められ，そのうち石棺身を据える部分は，上段下面から約20～40cmにわたって，溝状に深く穿たれていた。(1) この土壙内のやや東に偏して，長軸をN36°Wに向けた箱式石棺が置かれていた。石棺は流紋岩製で，11個の粗い加工の板状の切石を組み合わせたものである。各石の加工は外面は粗く，内面はやや丁寧である。石棺は粘土で覆われていた。(2) 土壙中には遺物はなかった。

石棺身は長辺各３個，短辺各１個，計８個の切石からなる。短辺の２石は長辺の２石の間にはめこまれており，はめこみ用の溝はない。長辺側石は下部11～16cm，短辺側石は34～35cmが土中に埋められ固定されていた。長辺東側石は，北石が長さ１１０cm，厚さ10cm，中石が長さ84cm，厚さ13cm，高さ38cm，南石が長さ60cm，厚さ13cm（いずれも最大値，以下同じ）を測り側石全長が２５０cmとなる。西側石は，北石が長さ60cm，厚さ13cm，中石が長さ１１６cm，厚さ17cm，高さ37cm，南石が長さ70cm，厚さ15cmで，側石全長は２４５cmを測る。短辺側石は，北石が長さ40cm，厚さ11cm，高さ57cm，南石が長さ41cm，厚さ７cm，高さ57cmである。

石棺蓋は３個の切石からなる。いずれも正方形に近い。北石と中石との接合部西端には，２個の角礫をつめている。北石は長さ90cm，幅75cm，厚さ12cm，中石が長さ74cm，幅76cm，厚さ10cm南石が長さ78cm，幅74cm，厚さ11cmで，蓋全長が２３９cmとなる。蓋上面は土壙検出面から12～20cm下位にある。

棺底には底石はなく，地山上に８～12cmの土盛りを行ない，その上に径１～２cmの円礫を下に，３～４cmの円礫を上に，２段に敷きつめ，さらにその上に，厚さ２～５cmの粘土をおく。この粘土は短辺に平行して真中がやや凹み，かつ中心から南端にかけて次第に肥厚する。

北側石に接して棺底にほぼ長方形の角礫が２個接して置かれていた。枕石とみなされる。東石は長さ17cm，幅12cm，西石は長さ20cm，幅10cmを測る。二つとも北側を小角礫により補足されていた。棺内部には全面に朱が塗られていた。棺内には人骨，副葬品等の遺物は存在しなかった。

発掘調査によって知られる埋葬順序は次のようなものと認められる。Ｉ，土壙を掘る。その

際，石棺を置く部分をやや深く掘り窪める。Ⅱ，石棺身を組み，深く掘り窪めた部分に土を入れて固定する。Ⅲ，棺底に礫を２段に敷きつめ，その上に粘土をおく。Ⅳ，枕石を置き，遺体を安置する。この前後どちらかに棺内部に朱を塗る。Ⅴ，内面に朱を塗った蓋で棺身を覆う。Ⅵ，棺を粘土で覆う。Ⅶ，土壙に土を入れて埋める。

発掘の際，墳丘，周溝等の外部施設は認められなかった。墳丘は当初有していたとしても，それほど高いものではなかろう。埋葬は枕石が一組であるので，単独埋葬の可能性が強い。

2. 竪穴住居址（ＰＬ．３・６）

箱式石棺の東約10ｍの丘陵頂部平担面から東斜面にかけての肩部にある。隅丸方形のもの，（１号住居址とする）と方形のもの（２号住居址とする）とが重なっているが，切り合い関係は把握できなかった。

１号住居址は南北長が4.９ｍで，床面の東約３分の２は削平されている。また住居址検出面から床面までの深さは約15㎝しかなく，壁面上部がかなり削平されているものと思われる。壁ぎわには周溝が巡る。周溝はＵ字溝で幅20～28㎝，床面からの深さ５㎝を測る。主柱は４本で四隅に位置する（柱穴１～４）。柱穴１は円形で，径28㎝，深さ46㎝。柱穴２は円形で，径27㎝深さ50㎝。柱穴３も円形で径32㎝，深さ57㎝。柱穴４は楕円形で長径40㎝，短径32㎝，深さ46㎝である。柱の間隔は１と２が２５７㎝，１と３が２５７㎝，３と４が２５７㎝，２と４が，２８２㎝となり，東側の柱間隔のみがやや広い。

２号住居址は南北に長軸をもつ長方形と推定されるが，床面の東約３分の１は削平されている。角がわずかに丸味を帯びる。南北長6.２ｍ。竪穴壁面は１号住居址外の南側でわずかに残存するのみで，壁面上部が大きく削平されていると思われる。壁ぎわに周溝がめぐる。周溝はＵ字溝で最大幅18㎝，床面からの深さ４～８㎝である。主柱は４本で中央よりにある（ただし東南の柱は削平されている。）。柱穴５は径30㎝の円形で，深さ34㎝を測る。柱穴６は長径37㎝，短径28㎝の楕円形で，現状での深さ22㎝であるが，上面がかなり削りとられている。柱穴７は楕円形で，長径28㎝，短径23㎝，深さ37㎝。柱の間隔は５と６が１９８㎝，５と７が270㎝で，南北が著しく広い。１号・２号住居址とも，中央ピットは存在しない。また柱痕はいずれの柱穴からも検出されなかった。

以上の柱穴以外に８～13のピットがある。12・13を除けば，いずれも住居の支柱とみなされるが，１号・２号のいずれの住居址に伴なうものか判別できなかった。柱穴８は長径33㎝，短径22㎝の楕円形で深さ18㎝を測る。柱穴９は楕円形で，長径52㎝，短径40㎝，深さ38㎝，柱穴10も楕円形で長径48㎝，短径35㎝，深さ19㎝。柱穴11は径28㎝の円形で，深さ16㎝である。ピット12は，径49㎝の円形で深さ13㎝である。これは住居址埋土を切り込んでいるので，２つ

の住居址より新しいものである。ピット13は長軸41㎝，短軸21㎝のひょうたん形で2個の円形ピットが重なっているともみられる。深さ9㎝。他の柱穴に比して非常に浅いので，柱穴かどうか疑問のあるところである。

ピット13の西北70㎝に長径20㎝，短径13㎝の楕円形の焼土面が検出された。住居の炉址と思われるが，1号・2号のいずれの住居址に伴なうものかわからなかった。

遺物は1号・2号住居址とも埋土中に赤褐色ないし薄褐色の弥生土器ないし土師器片若干が出土したのみである。図示可能なものはない。土器の時期も明確にできない。

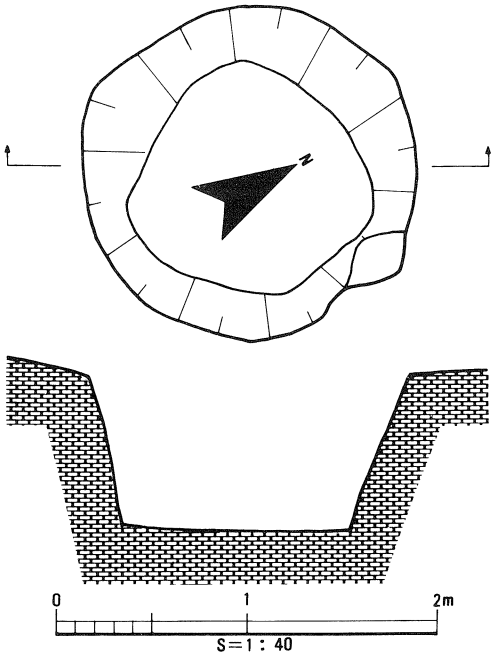


Fig.5　1号土壙

3.　土　　壙（Fig. 5・6）

丘陵東斜面で土壙3基を検出した。1号土壙は，箱式石棺の東北約37mにある。不整円形で，径1.8m，深さ0.84mを測る。2号土壙及び3号土壙は，1号土壙の南約17mにある。両者は重なり合っているが，切り合い関係は把握できなかった。2号土壙は，復元すれば1辺1.2m程の隅丸方形となる。深さ1.08m。3号土壙は，2号土壙に南接する。形は隅丸長方形と思われる。長辺1.8m(復元値)，短辺1.05m，深さ0.69mを測る。これら3基の土壙の埋土中から近世頃の陶磁器が出土した。土壙の性格は明らかにしがたい。

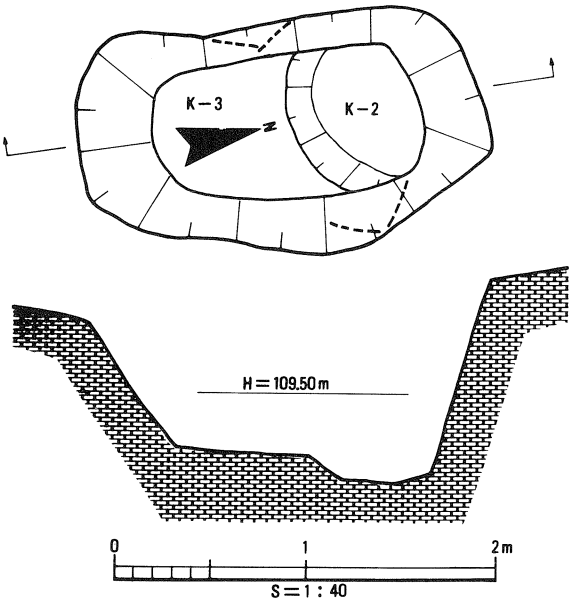


Fig.6　2・3号土壙

4.　その他の遺構（PL. 1）

1号住居址の南東約9mと同じく北約6mの地点で，それぞれ3個の柱穴状ピットからなる遺構を検出した。前

者を不明遺構1，後者を不明遺構2とする。不明遺構1は，南北に3個の柱穴状ピットが並ぶ。ピットは円形で，径20～30cm，深さ10～20cmを測る。不明遺構2は，L字状に3個の柱穴状ピットが並ぶ。ピットは円形で，径30～40cm，深さ10～25cmを測る。これらのピットは，いずれも柱穴と推定されるが，現状では建物を構成せず，遺構の性格は不明である。

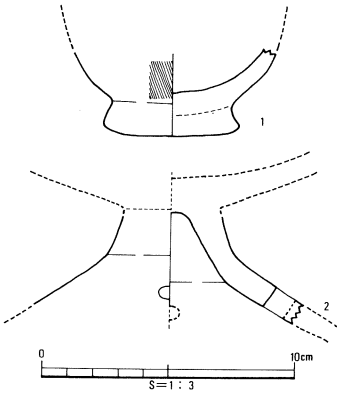


Fig. 7 遺構に伴なわない土器

5. 遺　　物

発掘調査により出土した遺物は，弥生土器ないし土師器・陶磁器である。出土量は著しく少なく，全体で数10片にすぎない。このうち，遺構に伴なう土器は，住居址埋土出土の時期不明の細片と，土壙埋土出土の近世頃の陶磁器の破片である。

Fig. 7は遺構に伴なわない土器で，不明遺構1付近の撹乱層から出土した。1は鉢形土器の底部破片である。粘土円板を貼りつけて台状の底部をつくり，体部は内反する。底部径は54mmを測る。外面には，刷毛目調整が認められ，底部のくびれ部には，横なでが施こされている。内面は剥離が著しく，調整技法はわからない。胎土は細かい砂粒を多く含み，焼成は黄褐色を呈する。2は高坏形土器の脚部破片である。脚部は低く，くの字状に外反する。裾部に貫孔をもつ。調整技法は，外面はヘラみがき，内面は縦方向のなでである。胎土はよく精選され，暗褐色に焼成されている。Fig. 7の土器は，断片的資料のため時期はよくわからないが，おそらく弥生時代終末期に位置づけられるものであろう。

註

(1) 土壙下段の埋土である黄褐色土層は，地山との識別が困難なため，この黄褐色土層を地山と誤認し，棺身底部を埋めている下段掘り方を相当部分破壊したのち，誤りに気付いた。従って，下段掘り方は充分把握できなかった。PL. 2の長辺断面図のうち，破線で記している部分は，推定によったものである。

(2) 発掘の際，不注意により，実測及び写真撮影を行なうことなく，石棺を覆う粘土を取り去った。PL. 2に図示した断面図の粘土は，ほぼ南北に残した土層観察用あぜの所見により推定復元したものである。

Ⅳ　結　　語

以上のように発掘調査により発見された遺構・遺物はごくわずかである。調査も遺跡全体に及ぶものでなく，たまたま発見された遺構・遺物のみから，遺跡全体の性格を推測することは慎しむべきであろう。ここでは，本遺跡の中心的な遺構である箱式石棺について，若干考察し，まとめにかえたい。

本遺跡の箱式石棺は，11個の板石を組み合わせたもので，副葬品は知られていない。同様な構造をもち，かつ副葬品の非常に少ない箱式石棺は，津山地方に若干の類例がある。すなわち，津山市沼6号墳は1辺13,8m，高さ1.5mの方墳で，粘土槨と箱式石棺の二つの内部主体をもつ。このうち，箱式石棺は8個の板石を組み合わせたもので，副葬品は短剣1振のみである。古墳の築造時期は5世紀頃と推定されている[1]。津山市下道山南古墳は一辺約15m，高さ1.7mの方墳で，2基の箱式石棺を内部主体とする。このうち，第二主体は8個の板石を組み合わせたもので，副葬品は紡錘車形石製品3個である。時期は5世紀中葉に比定されている[2]。津山市隠里箱式石棺はやや構造が異なるが，古墳時代前期[3]に属するものと推定されている[4]。このように，数は少ないが，津山地方の箱式石棺がいずれも5世紀を中心とする古墳時代前期に比定されていることは，本箱式石棺についても，同様の時期と推定することを可能にさせる。

本箱式石棺は，発掘当時墳丘を伴っていなかったが，周辺が桃畑として開墾されていることなどからみて，墳丘が削平されてしまったと考えるべきであろう。この場合，大規模な墳丘を想定することは無理である。副葬品も残存するものはなく，簡易な埋葬形態をとるが，丘陵頂に単独で営なまれていることなどからみて，この地域のある首長を埋葬した古墳として理解することが可能である。

Ⅰでも少しふれたように，津山市川崎・日上から野村・近長にかけて拡がる加茂川流域の平野を中心とする地域には，多くの前期古墳が分布する。すなわち，日上天王山古墳は全長55mの前方後円墳で，前方部が中ほどから大きく開く古式形態をとる[5]。近長四ツ塚2号墳は全長45mの前期前方後円墳である[6]。高野山西正仙塚古墳は全長56mの前方後円墳で，長持形石棺を内部主体とする。5世紀前半頃と推定される[7]。井口車塚古墳は全長36mの帆立貝古墳で，内部主体は完全に破壊されているが，陪塚出土の須恵器の年代から，5世紀後半頃の築造と考えられる[8]。これらはほぼ世代ごとに継起的に造られたと考えられ，古墳時代前期の加茂川地域が一定の政治圏を形成していたことを示している。一方，この地域には，国分寺飯塚古墳[9]（円墳，径35m）・近長夫婦北塚[10]（方墳，方26m）・同南塚[11]（方墳，方25m）・兼田丸山古墳[12]（円墳，径24m）など比較的大型の前期に属する円・方墳も造られる。さらに，近長四ツ塚1号墳[13]（方墳，

方15m）など小型の前期古墳も存在する。これらの円・方墳は単独もしくはそれに近い状態で築造されており，いずれも首長墓とみなすことが可能である。このような古墳時代前期の加茂川地域の墓制のあり方は，前方後円墳の被葬者を頂点とする首長層間のヒエラルヒーが形成されていたことを示すのではあるまいか。

八出覗山古墳は，このような加茂川地域を中心とする古墳時代前期の首長層の墓制の一形態として把握されるのである。

註

(1) 今井尭・渡辺健治・神原英朗・河本清『美作国津山市沼6号墳調査報告』(『津山郷土館報第1集』1968，『古代吉備　第6集』1969，所載)

(2) 岡山県教育委員会『下道山遺跡緊急発掘調査概報』1977

(3) 古墳時代の時期区分としての前期・後期の概念については，近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学Ⅳ　古墳時代上』(1966)による。また，この二時期区分とⅠで述べた発生期・発展期などの区分との関係は，月の輪古墳刊行会『月の輪古墳』(1960)に述べられている。

(4) 渡辺健治「美作隠里箱式石棺調査報告」(『古代吉備　第2集』1958，所載)

(5) 津山市教育委員会『津山の文化財』1976

(6) 同　上

(7) 湊哲夫「高野山西正仙塚古墳」(津山市教育委員会『津山市文化財年報1』1975，所載)

(8) (5)に同じ

(9) 同　上

(10) 津山市教育委員会『津山市文化財調査略報　第2集』(1961・62年度分)

(11) 同　上

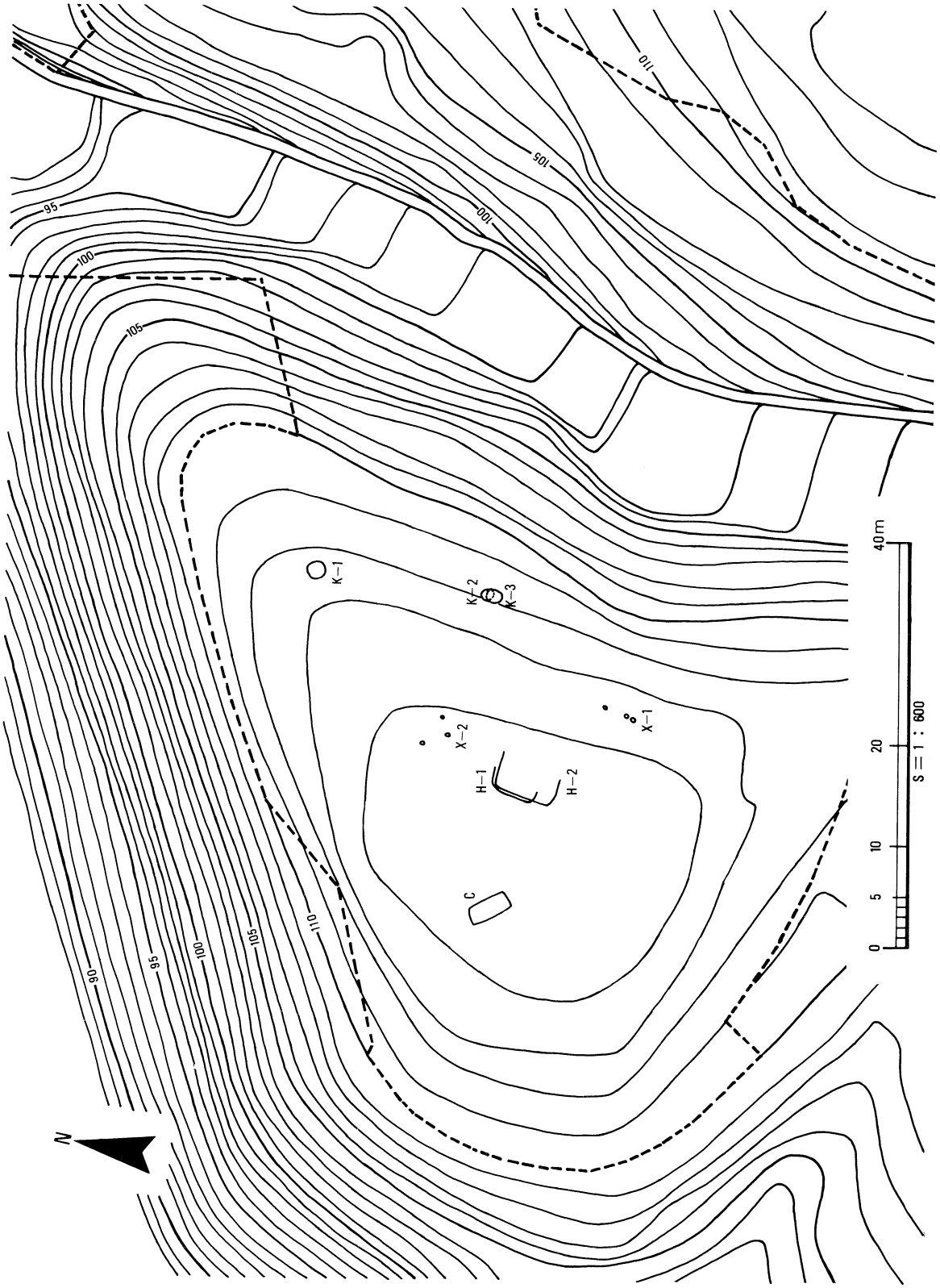
(12) 岡山県教育委員会『岡山県遺跡地名表　―埋蔵文化財包蔵地一覧―』1963

(13) (5)に同じ

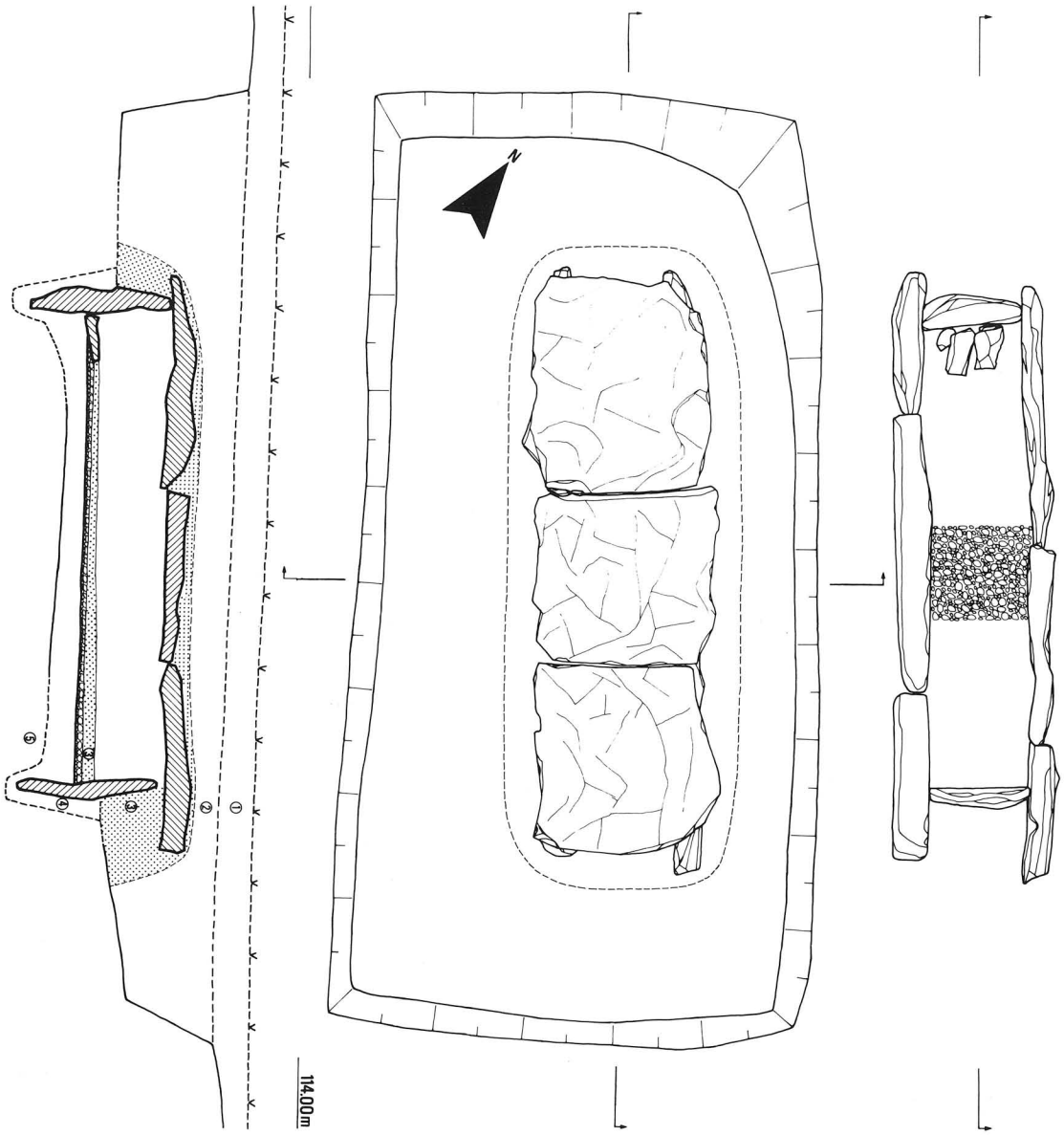
図　　版

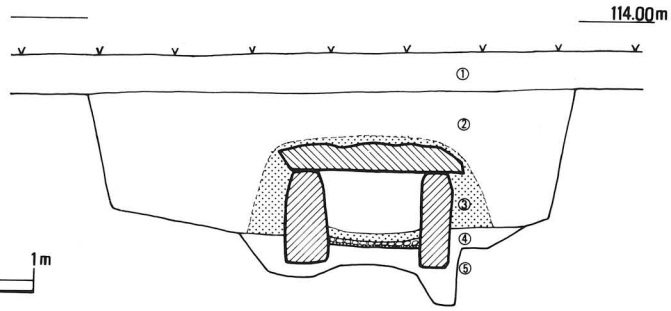
遺構配置

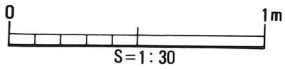
PL. I



箱式石棺

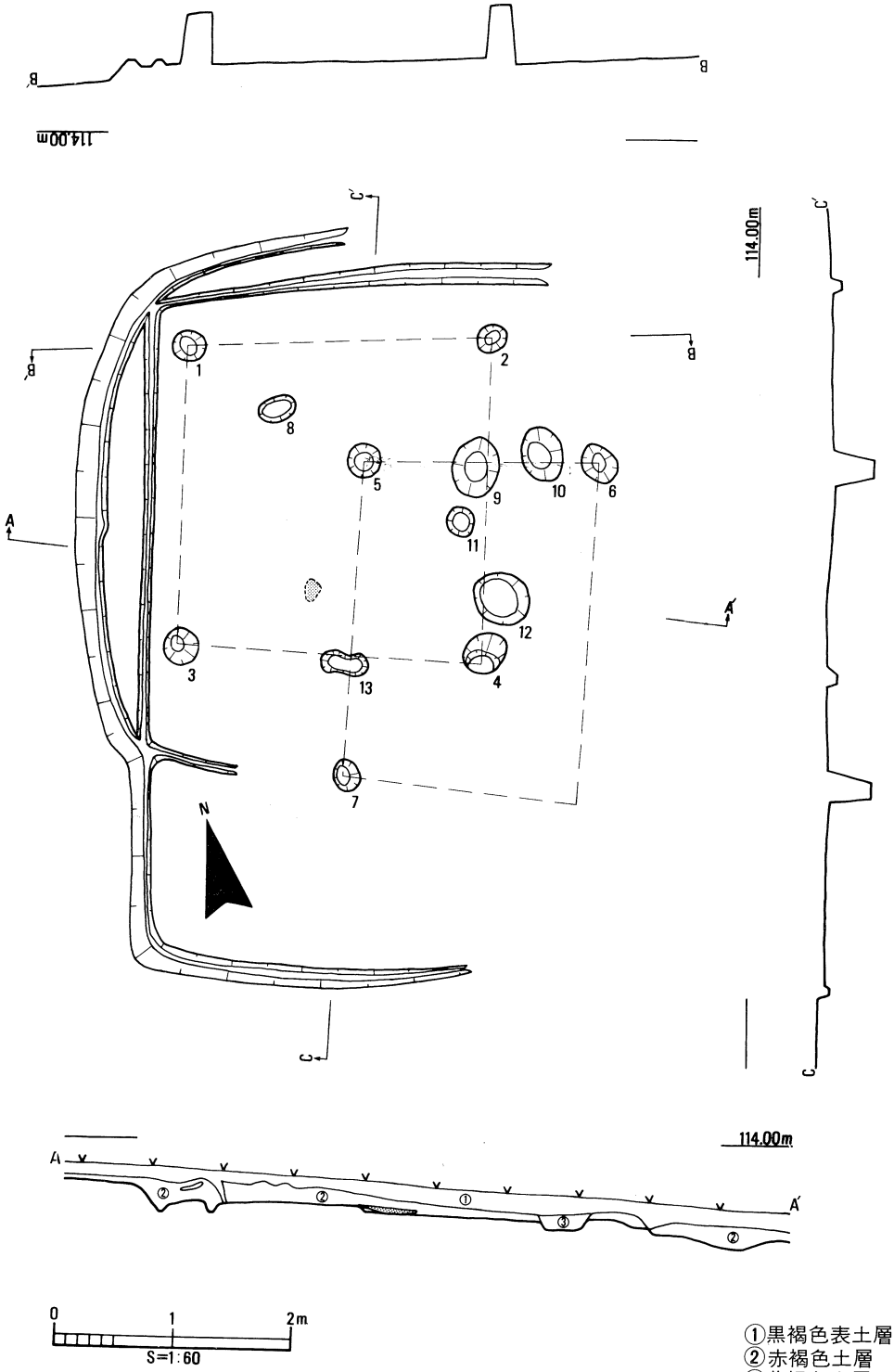






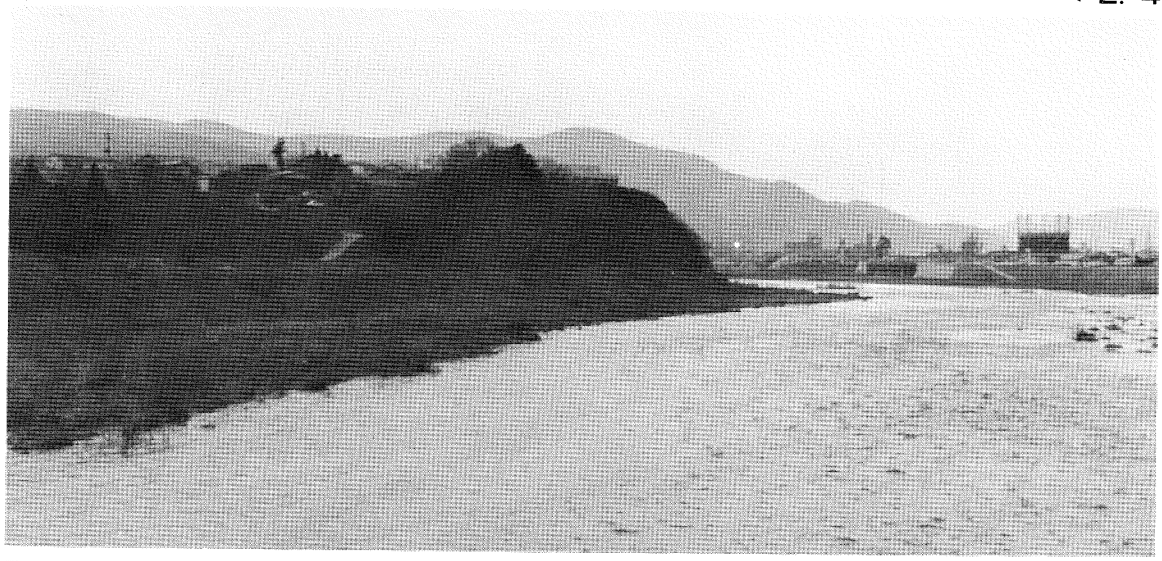
①黒褐色表土層
②黒褐色土層
③粘土
④黄褐色土層
⑤地山

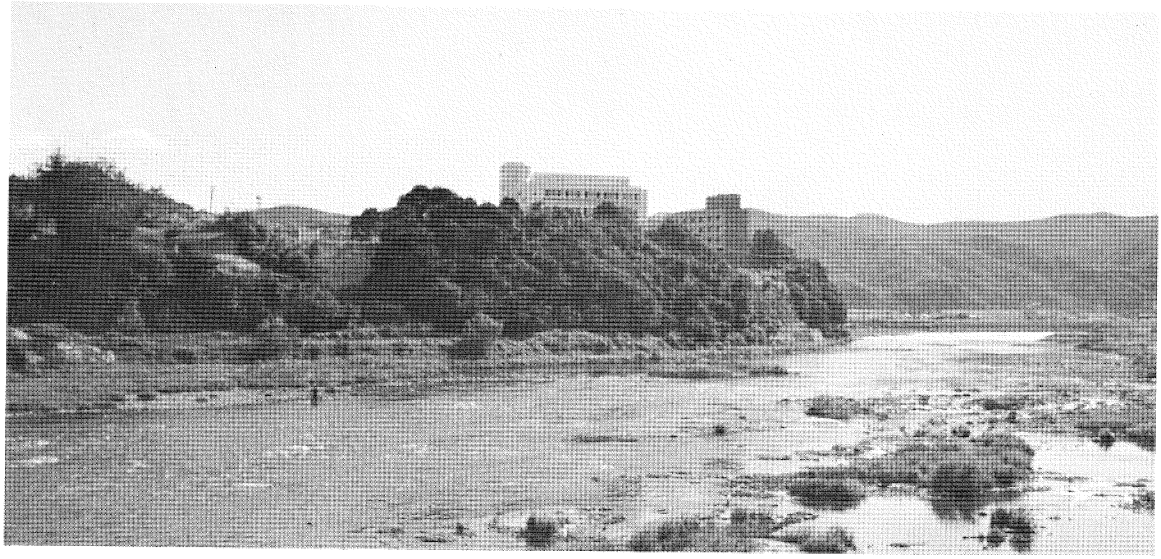
竪穴住居址

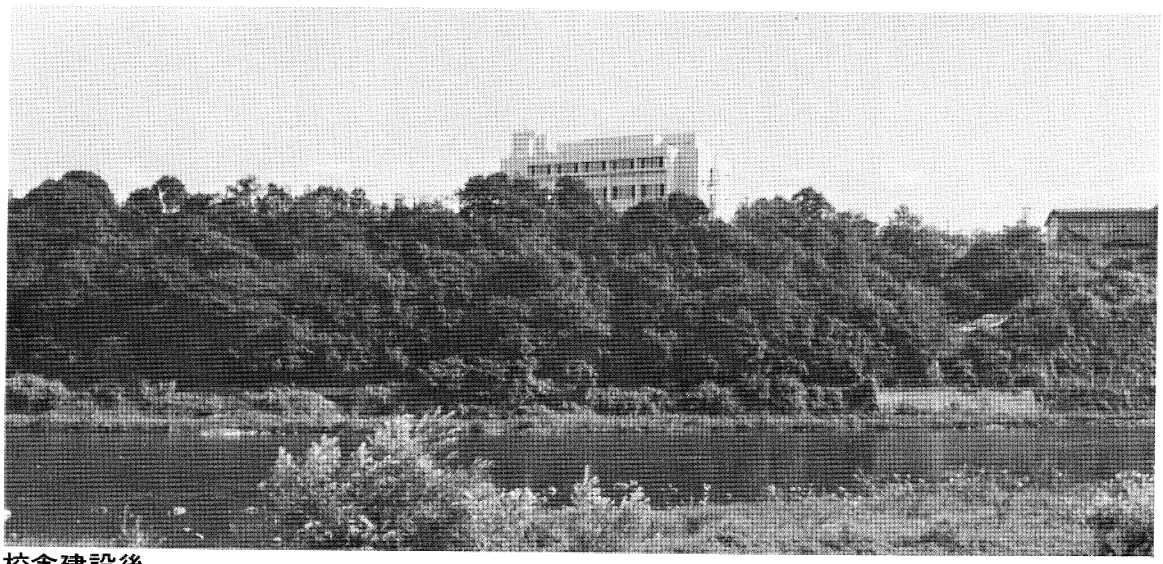


①黒褐色表土層
②赤褐色土層
③黄褐色土層

遺跡遠景

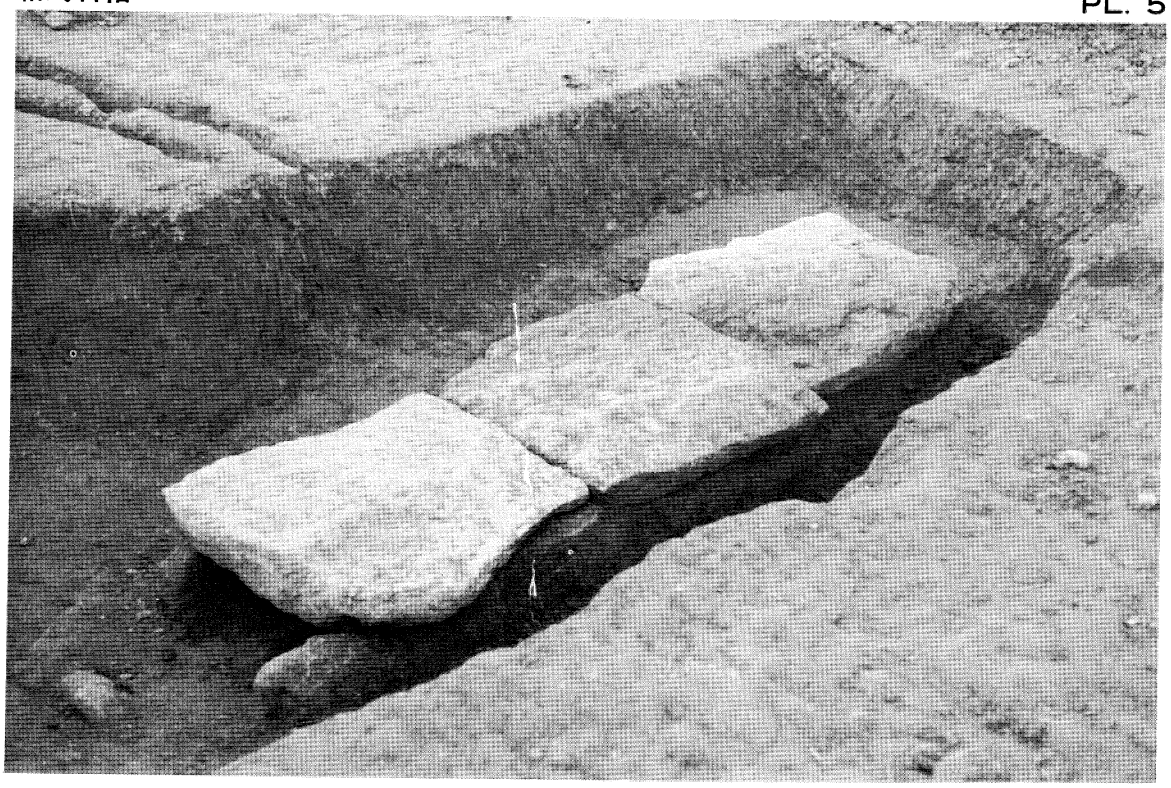






校舎建設後

箱式石棺



竪穴住居址

八出覗山遺跡発掘調査報告

1977年3月31日発行

発行　津山市教育委員会
岡山県津山市山下97番地の1

印刷　美作印刷工業株式会社
岡山県津山市二階町57